

スピリッツ



花之咲真

「皆はもう知っていると思うが、うちのクラスの橋本が昨日から行方不明になってる」

朝、二年二組担任の矢田部浩二がジャージ姿でそういった。教室がざわつく。

「はい、みんなざわざわしない。親御さんの方には『家出します』ってメールが届いてるらしいんだが、何か事情を知っている人がいたら、先生に教えて欲しい」

クラスメイトは互いに顔を見合わせながら「何か知ってる？」と聞きあつた。

しかし岡崎彰人は、窓際の一着ろに座っていることもあつて、それには参加しなかつた。それどころか、彼は朝一番から眠そうに目をつぶっていた。

「おい静かに。事情を知ってる人は速やかに先生のことまで。知らない人は余計な噂を立てない。それじゃあ、ホームルームはここまで。みんな次の授業遅れるなよ」

矢田部はそういつて、出席簿を抱えて教室を出ていく。

「橋本のやつ、家出だったのかよ」

「梨沙が家出なんてすると思う？」

眠気を我慢できずに机に突っ伏した彰人の周りで、クラスメイト達が噂を始めた。

たしかに橋本さんが家出なんてらしくない、と彰人も思った。

彼女は容姿端麗、成績優秀、その上スポーツも得意で、この中学のアイドル的な存在だ。家出なんて不良かメンヘラがしそうなこと、あの橋本さんがするなんて不思議だった。

「おい、彰人は何か知ってる？」

彰人はうしろから声を掛けられた。振り返ると彰人の友達伊藤政樹がいた。

「いや、なにも」

「だよな。てかなんでお前そんな朝から眠そうなんだよ」

「いや、何か昨日眠れなかつたみたいで」

「今から体育だぞ。そんなんで大丈夫かよ。しかもお前指も怪我してるじゃん。今日ソフトボールなのに」

「大丈夫、大丈夫。それより橋本さんの件、僕、放課後少し調べてみるよ。政樹も一緒にどう？」

「調べてどうやって？ お前橋本さんのLINEも持っていないだろ」

「僕の超能力だよ」

「またそれかよ。中二病もいい加減にしろつて。俺はパス。今日塾あるから」

「そっか」

「それより早く着替えるよ。矢田部また怒るぞ」

政樹はそういつて彰人を急かした。

じゃあ一人で調べるしかないか……

彰人は重い体をおとして服を脱ぎだした。

そのあとのソフトボールが散々だったのは言うまでもない。

僕には超能力がある。

桜ヶ丘中学二年の岡崎彰人は、そう確信していた。

これは中学二年生にありがちな中二病などでは断じてなく、真正銘本物の力だ。

力の存在に気付いたのは小学校四年のころ。テストの点数が悪かったせいで親に友達の家に行くのを禁止された時、瞬間移動できたならなと考えていると、気付いたら友達の家でゲームをしていた。それから何度か行きたい場所を願ったらその場所に瞬間移動していることがあつた。

彰人はこの力をテレポートと呼んでいた。

もう一つはサイコメトリーだ。

彰人は物を触ると、その物の持ち主やその物に触った人の直前の行動などが感じ取れた。こちらの能力の方はテレポートよりも発動条件が厳しく、あまり成功はしないのだが、発動すれば強力だった。

どちらも使用すると体力を消費するため、頻繁に使うわけにはいかないのだが、今回、彰人はその力をフルに使うつもりだった。

というのも、橋本梨沙は彰人が密かに想いを寄せる相手だったからだ。彼は梨沙と小学三年の時に初めて同じクラスになつてから、ずっと彼女のことが好きだった。

彰人は自分が助けないと、という謎の使命感に駆られていた。

五時間目の授業が終わわり、放課後になると、彰人は真つ先に靴箱へと向かつた。

橋本さんは、昨日の放課後から行方が分からなくなつているらしい。ならば、最後の痕跡を探す手始めとして、靴箱が最適だろう。

彰人は靴箱に貼られたネームシールを順番に読んでいき、橋本梨沙の靴箱を見つけた。彼女の靴箱のフタに右手を押し当てると、彼は目を閉じ、靴箱に残る残留思念を感じ取ろうとする。

頭の中に何十本もの映像が流れるような感覚がしたあと、パツと目の前にある光景が浮かんだ。

それは、橋本梨沙が靴箱を開け、中に入っていた手紙を取り出す様子だった。

ラブレター……？

映像は進み、梨沙はその手紙を開いて中身を読みながら、昇降口を出ていく。手紙の文面に集中していたせい

か彼女は右足を外の水たまりに突っ込んでしまった。
しめた！

彰人は靴箱のフタから手を離し、軽くガッツポーズをした。

残留思念は液体に多く集まる。テレビに出てくるサイコメトラーが水場での殺人を当てるのはそのせいだ。水たまりを調べればもっと多くの情報が手に入るかもしれない。

彰人は昇降口を出て、今度は、先程映像で梨沙が足をつけた水たまりに駆け寄って、右手の人差し指をつけた。さつきよりも多くの映像が頭の中を駆け巡る。彰人はその中から梨沙の残留思念を探した。

刺すような痛みのもとに見えたのは、梨沙の手元の映像だった。彼女の持つ手紙の内容がよく見える。

『橋本梨沙さんへ』

大事な話をしたいので、ひばり台の住宅地の裏にある青と黄色の壁の倉庫に来てくだ……』

手紙をそこまで読んだところで、頭の痛みがひどくなってきた、サイコメトラーをそれ以上は続けられなくなった。

彰人は額をさすりながら、軽く口角を上げた。

これでかなりの手がかりが掴めた。

橋本さんは誰かに手紙で呼び出され、その倉庫に行った。そして行方不明に……。

これは家出なんかじゃないと彰人は思った。

おそらく事件に巻き込まれている。犯人は手紙で呼び出したやつで間違いない。

早くしないと橋本さんが危ない。

けれど、彰人がサイコメトラーで得た情報を警察に伝えても信じてもらえないはずはない。

僕がやるしかない。

彼は全速力で校門を駆け抜けていった。

彰人のテレポートには一つ欠点があった。

それは、テレポート先のことを認識していないとテレポートできないというものだ。

例えば、いきなり行ったことのない海外に行くことはできないし、写真やテレビで見た場所でも、そこがどこにあるのかを確実に把握していないと飛べなかった。

つまり、彰人はそのひばり台の倉庫までは歩いていくしかなかったのだ——

その例の倉庫は、住宅地の裏手の道沿いにあった。倉庫の周囲は、いつ誰が捨てていったのかも分からないようなゴミが散乱していて、廃車同然の車までもあった。

もとは誰かの持ちものだったのだろうが、持ち主がいなくなり、荒れ果てるうちに近くの住民がゴミを投棄するようになったのだろう。

彰人はそのゴミの山を避けながら、倉庫へと歩いていった。草むらのあちこちに捨てられた鉄線が制服の上から足をなぞる。

倉庫の扉の前につくと、扉には大きめの南京錠がつけられていた。

この鍵はいつから掛けてあったのだろうか。昨日、橋本さんが来たときからすでに掛かっていたのなら彼女は倉庫には入れていないはず。でも……。

悩んでいるなら実行したほうが早かった。

彰人は行ったことのない場所にテレポートすることはできないが、仮にその場所が行ったことのない場所でも、「どこにあるか」さえ認識していれば飛ぶことができた。

今回の場合でいえば、これまでこの倉庫に入ったことがなくても、壁を一枚隔てた向こう側と分かっていたら飛ぶことができるということだ。

彰人は目をつぶり、倉庫の中を強く念じた。

飛べ……、飛べ……、飛べ……。

次の瞬間、彰人は足元に大きな穴が空いたような感覚に襲われ、目の前が真っ暗になった。

彰人が目を覚ますと、そこは汚い小屋の中だった。若干のめまいに襲われながら彼は辺りを見渡す。

左右には鉄製の戸棚が並べられていて、そこには錆びついた道具がしまわれている。中央には石油ストーブが置いてあり、弱火で焚いてある。

そして、小屋の奥に置かれたソファには、目隠しをされ、手を後ろで縛られた少女が横たわっていた。

彰人は瞬時に状況を理解した。

テレポートに成功したんだ。

だとしたら、あの少女は、橋本さん……？

「あ、あの……」

彰人は恐る恐る彼女に声をかけた。

「な、なにー？ 誰！ あんたさつき出でいったでしょ」

彼女は悲鳴に似た声でいった。

あんた……？ 犯人のことか？

「ほ、僕は、君を誘拐した人じゃないよ。君を助けにきたんだよ」

「た、助けにきた？」

彼女の声には不安と疑いが感じられた。

「あ、ちょっと待って。今日隠しを外すから」

彰人はそう言うと、梨沙に近寄り、彼女の目隠しを外した。彼女は目を細めながら彰人を見る。

「お、岡崎君？」

「……うん」

彰人はそう答えながら、近くでみる梨沙の可愛さに言葉を失った。

「岡崎君がどうしてここに？ 鍵が掛かってたはずだけど」

「あの……、実は僕、みんなには秘密にしてたけど、超能力を持つてるんだ。テレポートとサイコメトリー。あ、橋本さんはサイコメトリーって知ってる？」

彰人は早口でそういった。

長い沈黙。

「あの、ちよつと何を言ってるのか分からないんだけど……」

そりゃいきなり信じるのは無理か、と彰人は思った。

「超能力はいいから、早く助けを呼んできて。あいつが帰ってくる前に」

「あいつって？」

「私を監禁した犯人。岡崎君が入ってくる少し前までの。だからまた戻ってくるかも」

「分かった。警察を呼んでくる。橋本さんはここで待ってて。すぐに呼んでくるから」

彰人はそういつて目をつぶる。

「ちよつと、なにやってるの？」

「いや、だからテレポートしないと。扉は鍵が掛かってるし」

「ふざけてないですよ。私殺されるかもしれないんだよ！」

橋本は叫んだ。

「ご、ごめん。でもふざけてるわけじゃなくて……」

「シッ！」

彰人の言い訳を梨沙が遮った。

「今、何か物音しなかった？」

「いや、分からないけど」

「あいつが戻ってきたのかも……」

梨沙は声をひそめていった。

「岡崎君、目隠しをもどして。あと、あなたはどこかに早く隠れて」

彰人は梨沙に言われた通り、目隠しをつけ直した。

そして倉庫の中を見渡し、一応隠れられそうな場所を探す。

残念ながら、そんな場所はどこになかった。

でも大丈夫だ。

彰人は目を閉じ、さつき通ってきた住宅街の道を頭思い浮かべる。

犯人が戻ってくる前に、ここからテレポートしてしまえばいい。

飛べ！

痛くなるほど強く目をつぶって念じると、彰人は、

ジェットコースターが急降下するときのような感覚に襲われ、目の前が真っ暗になった――。

「岡崎君？ 岡崎君……？ 隠れられた？」

梨沙は小声で彼を呼んだ。

返事はない。

うまく隠れられたんだろうか。

梨沙は倉庫の内装を思い出そうとする。

たしか左右に棚があるくらいだ。隠れるとしたらそこしかないが、簡単に見つかってしまうだろう。

「ねえ、岡崎君ってば、大丈夫なの？」

梨沙がもう一度声をかけるが、返事はなかった。

でも、どうしてここが分かったんだろう――

梨沙にはそれも疑問だった。

あの手紙の存在は私しか知らない。こんな倉庫をピンポイントで探す確率も低い。

もしかしたら本当に彼は超能力者？

梨沙はそこまで考えて、ないなと首を振った。

たしかに超能力があったらそんなの簡単かもしれないが、本当にそんなものがあるとは思えない。

じゃあどうやって……

梨沙がそう考えた時、ガラガラと重い鉄の扉の開く音がした。

「梨沙ちゃん、俺がいない間、いい子にしてた？」

男の声がした。

梨沙は何も答ええない。

「おいおい、あんま俺に冷たくしないでよ。俺はさ、梨沙ちゃんのこと、好きなんだから。それに、そういう態度ばかりとっていると、夕飯あげないよ」

今日は、朝に男の出したパンと牛乳以外何も口にして

いない。こんな男の出したものを食べるなんて屈辱だが、さすがに食べないと助けがくるまでもたないだろう。

「今日もまた、昨日みたいに夜通しお話ししようよ」

男が近づいてきていった。男の鼻息が梨沙に当たる。

梨沙は男を追い払うように噛み付く。

「おい、また噛みつくつもりか？ 梨沙ちゃんが昨日噛み付いた指、まだ痛いんだからな」

「私に触らないでください」

「はいはい、分かったよ。別に君をどうしようってわけじゃないんだ」

「あの、今開放してくれたらこのことは警察には言いません。だからもう家に帰してくれませんか」

「いや、まだダメだね」

「家出なんてごまかし、そう何日も持たないと思います。今日も帰らなかったらさすがに警察も動きまます」

「それなら君の友達に、『泊まっているってことにしとて』って連絡するよ。それで今日くらいはまた持つだろう」

梨沙には男の目的が分からなかった。

手紙で倉庫に呼び出し、監禁。しかしそこから親に身代金を要求するわけでもない、私に手を出すわけでもない。

ただこうやって話すだけなのだ。

「ねえ、梨沙ちゃん。今日はなにが食べたい？ 食べたものをいってくれたら、俺がそれを買ってきてあげよう」

「なんでもいいです……」

正直空腹感はあるけども、食欲や食べたいものなど思いつかなかった。身体は疲れきっているし、男がなにをするのか分からない恐怖で頭が変になりそうだった。

「分かった。じゃあ適当に買ってこくるから。大人しくしてなよ。騒いだりしたら酷い目に遭わせるから」

男はそういつて外に出ていくと、またあの重い扉を閉めた。

男の足音が遠ざかっていくのを確認してから、梨沙は

「ねえ、岡崎君」

と彼に呼びかけた。

しかし返事はなかった。

彰人が目を開けると、倉庫から500メートルほど離れた道の真ん中だった。

成功した——

彰人はすぐにポケットからスマホを取り出し、近くの

交番を調べる。

交番はここから歩いて十分くらいのところにあった。

テレポートできれば早いのだが、知らない交番のため彰人は走ってそこへ向かった。

交番に着くと、彰人はクラスメイトが行方不明になっていることを伝え、その彼女の居場所が分かったことを告げた。

橋本梨沙の搜索願がでていたおかげで、警察もすぐに事情に理解した。

しかし彰人が梨沙の居場所を知った経緯をそのまま話しても信じてくれないどころか、変な疑いを持たれてしまうので、たまたまいつもと違う帰り道を通ったら、助けを呼ぶ声がした、ということにした。

倉庫に戻ると、鍵はかかったままだった。

この間に犯人は戻ってこなかったのだろうか、と彰人は思った。

彰人が見守るなか、警察は持ってきた道具で南京錠を壊し、中へと入っていった。

開いた扉から中を覗くと、警官達は梨沙の目隠しや手かせを手早く外し、持ってきた大きめのタオルでくるんでいた。

無事保護され、警官と一緒に出てきた梨沙は、彰人を見て、「ありがとう」と告げた。

彰人は小さく、「どうも」と呟いた。

事件から三日経ち、梨沙が月曜日に学校へ行くと、クラスメイト達からの質問攻めにあった。

犯人はどんなやつ？ どんなどころに監禁されていたの？ 犯人に何かされた？

梨沙はそのほとんど無視して、仲の良い女友達数人だけに詳しい事情を話した。

しかし梨沙が友達にも話さなかったことが一つだけあった。

それは彰人が助けに来たことだ。言ったところで信じてはもらえないし、変な噂を立てられるだけだ。彼のクラスでの立場を考えたら、あの日のことはお互いに忘れたほうがいいのだろう、と梨沙は思っていた。

だけど——。

梨沙は机の中に隠した綺麗にラッピングされた袋を撫でた。

給食を食べおわり、昼休みに入って皆がバラバラになるタイミングを見計らって、梨沙は彰人に声をかけた。

「ちよつと来て」

梨沙に呼びかけられた彰人は凄く驚いた顔をした。

梨沙はその顔のまま固まる彼の手を引いて、普段人が全く来ないB棟の四階踊り場まで連れて行った。

「あ、あのー、その……、どうして僕をここに？」

彰人は事情がよく分かっている様子だった。

「あ、えつと、その——」

梨沙も、自分で連れてきておいてなかなか話出せない。お礼を言うだけなのになんでこんなに恥ずかしいんだろう。

「あの、この前はありがとう……」

ようやく彼女は口を開いた。

「あ、いや……、どういたしまして」

彰人は顔を真っ赤にしている。

「岡崎君のおかげで助かった……」

梨沙はそういういながら、背中に隠したプレゼントを出すタイミングを探る。

「いや、僕なんかたいしたことしてないよ」

「でも、岡崎君が見つけてくれなかったら、私まだ捕まってもかもしれないし……」

梨沙は彰人の表情を見ようと少し顔を上げたが、彼も同じように下を向いていた。

「それでね、あの、別になりたいものじゃないんだけど、一応助けてくれたわけだし、そのお礼みたいな感じで……」

梨沙はそういって、プレゼントを彼の前に差し出した。

「え、これを僕に……?」

「え、あ、うん……。そう」

「あ、ありがとう」

彰人は赤ちゃんを抱えるみたいにプレゼントを受け取った。

「ほ、ほんとは、美味しいところのお菓子にしたかったんだけど、警察の事情聴取とかで買いに行ってる暇なくて。だから私の手作りなんだけど……」

「え、手作り!」彰人は変な声を出した。

「あ、ごめん。嫌だった?」

「そんな、そんな! 嫌なわけじゃないよ。大切に食べるよ。ありがとう」

彰人はそういって幸せそうに笑った。

「よかった……」

梨沙はとりあえずプレゼントを渡せたことにほっとしながら、ずっと疑問に思っていたことを彼に訊いた。

「ねえ、そういうえば、この前私を助けてくれた時、超能力を使ったって言ってたでしょ? でも本当はどうやって私を見つけたの?」

「えっ?」

「だって、超能力なんてありえないでしょう。だから本当はどうやったのかなって」

彰人は困った顔をした。

「どうやったものにも、本当に超能力で探したんだよ。」

サイコメトリーで橋本さんの残留思念を読み取って、レポートで倉庫に入ったり、出たりして……」

「それ本気で言ってるの?」

梨沙は真剣に訊いた。

「本気だよ、僕は本当に超能力を持つてるんだ」

彰人も真剣に答える。

「分かった。じゃあ今ここで見せてよ、その超能力を」

「いいよ。じゃあレポートを見せるよ。この踊り場から、あそこの一つ下の踊り場までテレポートする。よく見てて。一瞬だから」

彰人は自信満々にいった。

「分かった」

「いくよ……。飛べ!」

彰人は鋭い声で叫んだ。

「ま、まだ……?」

彰人が目を開けると目の前にいる梨沙が怪訝そうな顔で彼を見ていた。

あの馬鹿野郎。人の前で超能力を使いやがって……。

彰人は自分に悪態をついた。

「あれ、今日は調子悪いのかな……」

俺には超能力なんか無い。

彰人には分かってた。

テレポートもサイコメトリーも、自分のもう一人の人格がそう思い込んでいるだけの偽物だと。

岡崎彰人は二重人格だった。幼い頃から親から嫉いう名の暴力を振るわれ続け、彼は二つの人格を持ってしまっていた。

表の人格は気の弱い少年だが、裏の人格は目的のためには手段を選ばない邪悪な性格をしていた。

表の人格は、裏の人格になつていくときの記憶がなく、自分が二重人格であることを自覚していなかった。そのため、裏の人格になつている間に移動すると、表の人格にとつてはまるで瞬間移動をしたように感じるのだ。

サイコメトリーは記憶の復元だ。裏の人格で行った行動を表の人格は無理やり忘れていく。しかし、記憶を刺激するようなものを触ったりすると、記憶が一部戻り、まるで残留思念を感じとつたように錯覚する。

「なんだ、やっぱり嘘なんじゃん」

梨沙は安心したように笑った。

目的は果たしたかな。

彰人は手に持ったクッキーを見て思った。

内気な性格のあいつのためにここまでしてやったんだ。あとはお前が上手くやれよ。

「ごめん、ごめん。それよりさ、このお菓子、今食べていい?」

「え? いいけど、なんか恥ずかしいな」

梨沙は照れくさそうに笑った。

「美味しそうだから待ちきれなくて」

彰人は「なんのお菓子かな?」といいながら、袋の口に縛つてある金色のビニールタイをほどく。

そのとき、梨沙が口を開いた。

「あれ、岡崎君。手、怪我してる……」

彰人は手を止めた——